



目次

- P.1 卒業生の活躍
- P.2 就職活動トリガーイベント2021
就職内定者のメッセージ
- P.4 ワールドユースミーティング (WYM) 開催報告
「国際フィールドワークⅠ」の実施
- P.5 セントレアサテライトでの集中講義
- P.6 「ふくしAWARD2021」
「ふくしAWARD2021」大賞受賞者の声
留学生のボランティア・地域活動
- P.7 本学部の最優秀卒業論文賞の紹介
- P.8 「ワールド・コラボ・フェスタ2021」への出展
新任教員の挨拶



日本福祉大学 国際福祉開発学部

多様な背景や文化を持つ人びとと語り、違いを理解し、ともに生きる。多文化共生社会を創る力を磨く。

卒業生の活躍

本学部が2008年に設立されて以来、国内外の多文化共生社会への貢献を見据えた教育に力を注ぎ、多くの「グローバル人材」を育成してきました。今回、2014年卒の山田芽さんに寄稿してもらいました。山田さんは大学卒業後4年間の社会人を経験し、青年海外協力隊（現「JICA海外協力隊」）としてアフリカ中南部のザンビアで1年間活動した後、現在は地元の大学院へ進学をしています。勉学に励んでいる傍ら、本学のゲスト講師としても活躍しています。

私は「世界中で困っている人の助けになりたい」という思いでこの学部に入學しました。

国際協力や支援の現場、異文化理解など知らなかったことを学ぶ環境はとても貴重な時間でした。特に岐阜県の山間地に1ヶ月滞在したことは、日本の“田舎”と呼ばれる地域に目を向けるきっかけになりました。卒業後は地元熊本に戻り、地域に溢れかえる農畜産物の販売と魅力を発信する地域振興を目的とした仕事に就きました。農家さんと直接話をしながら仕事ができる環境は自分に合っていました。

そんな中、学生の時に一度志した国際協力への挑戦を決め、青年海外協力隊としてザンビアでコミュニティ開発という職種で活動しました。農家さんを対象に米栽培の普及や収入向上を目

2014年3月卒業 山田 芽 (熊本県立大学大学院)



ザンビアの子供たちと (2019年)

的とした活動や村の子どもへの授業など進めていたところで、新型コロナウイルス感染症の影響で帰国することとなりました。

現在は地元の大学院に進学し、農山漁村地域の地域資源を生かした地域づくりや地域振興に関する勉強、地震・洪水の被災地との関わりから学ぶことも多くあります。“グローバル”という言葉があるように、大学で広い視野で4年間学ぶことができたからこそ、現在地域の視点で行動したいと考えられるようになったのだと思います。



古民家の土壁塗り（熊本にて）

就職活動トリガーイベント2021：就職内定者のメッセージ

担当教員 張 淑梅

在学生の就職意識を高める目的で、毎年秋に3年生を対象に「就職活動トリガーイベント」を開催しています。2020年度はオンラインでの開催でしたが、2021年度は新型コロナの感染拡大が落ち着いた時期でもあり、11月17日に教室で対面形式で行いました。内定を獲得した4年生5名が内定までの道のりを振り返り紹介するとともに、就活で大切だと思われたことや後輩たちへのアドバイスについて情熱をもって語ってくれました。以下は5名の報告者から寄せられた後輩たちへのメッセージです。

◎伊藤優作さん（就職先：独立行政法人国立病院機構 東海北陸グループ）

私が就職活動に際して努力したことは次の3つです。

まず、学生生活で「誰よりも努力したと語れる経験」を多く作ることです。1年間のマレーシア留学やワールドユースミーティングでの統括の経験、最優秀成績賞までの努力過程をアピールした結果、他の就活生と差別化できました。

2つ目は、50社の会社説明会に参加し、業界・企業研究をしたことです。公務員や独立行政法人が第一希望でしたが、様々な業界の説明会にも参加した結果、民間企業と公務員、独立行政法人の

違いについて理解でき、志望理由に説得力が増したと感じています。

3つ目は、自分自身について深掘りすることです。自分はどういう人間なのか、長所や短所などをノートにまとめ、語れるまでにしました。その結果、面接で答えられないことはありませんでした。

以上3点を頑張ったおかげで第一志望から内定をいただきました。

最後に、努力は裏切らないと信じて、大学生活に悔いが残らないよう頑張ってください！

◎杉山和斗さん（就職先：愛知県教育委員会）

私が英語教員を目指そうと考えたのは中学生の時です。英語を話す楽しさを子供たちに感じてほしいと思い、教師になろうと決めました。英語の教員免許を取得するため、本学を選びました。教員採用試験のための準備として主に筆記試験、面接試験の2つの対策をしました。筆記試験の対策は3年生の8月から少しずつ準備を始め、面接試験の対策は翌年2月頃から始めていきました。教員採用試験までの期間を振り返ってみて、やっっておいて良かったと思うことが3つあります。

1つ目は、早めに過去問を解くことです。受験する自治体の出題傾向を知ることができるからです。2つ目は、積極的に先生や友達を頼ることです。面接練習をしてアドバイスをいただいたりしました。3つ目は面接試験で語れるような経験しておくことです。他の受験生と内容が被らないように話すことを意識しました。

良い準備は必ず良い結果に繋がると信じています。皆さんもぜひ頑張ってください。応援しています。

◎加藤沙弥さん（就職先：一般社団法人設楽町公共施設管理協会）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。国際福祉開発学部最大の魅力は学内で国際交流ができることです。留学生が多数在籍するため、日常的に英語を使ったり異文化について考えたりする機会が非常に多いです。また、「やりたい」という気持ちを応援し、サポートしてくださる先生方がいます。私自身も1年次からインターンシップに挑戦し、2年次からは日本語学習支援のボランティアにも参加しました。これも先生方がお

力添えして下さったからこそ経験することができたことです。

4年生の皆さんは卒業後のことについて考えている頃だと思います。私には希望する業界もやりたいこともなかったため、どのような生活を送りたいかを考え、理想に一番近い生活が送れそうな会社を選びました。就活は自分自身と向き合い、自分のことを知る良い機会です。コロナ禍での就活は大変だと思いますが、応援しています。

◎佐々木瞳歌さん

（就職先：人材派遣サービス業）

就活を始めるにあたって、まずは合同企業説明会に行きました。そこで業種や職種が思っていたよりもたくさんあることを知るとともに、興味がある業界とそうでないものが見えてきました。そして就活サイトで興味がある業界にどんな企業があるのかを調べ、少しでも良いと思えばエントリーして説明会に参加しました。

説明会はオンラインばかりでしたが、会社の方がどんな雰囲気かをしっかり見るようにしていました。面接では、会社がどこを重視して学生を選んでいるのかなどの特徴がわかります。そのため、私は選考ステップで違和感がないかを大切にしていました。また、そこの会社で働く自分をイメージ出来るかも選ぶポイントの1つにしていました。

◎BUI THI HOAさん

（就職先：東海愛知経営支援協同組合）

私は4年生の3月から、就職活動を始めて、コロナ感染拡大の影響で就職が大変でした。私は日本とベトナムの架け橋となる人材という仕事をしたいので、企業を探す時に、ベトナムにある支店なら説明会に参加しました。20社の説明会に参加しましたが、外国人を採用している企業は少なく、また、日本語能力検定のN1を持っていないから、応募できない企業が多かったです。したがって、留学生は3年生の終わりまでにぜひN1を取った方が良いです。私は説明会に参加しても応募ができなかったり、面接を落ちたりしましたが、諦めずに、6月にハローワークやSNSで外国人採用企業を探し、ベトナム語通訳の職種で面接を受けて、やっと内定をもらいました。卒業後、東海愛知経営支援協同組合で企業がベトナム人技能実習生の受け入れをサポートする仕事に就きます。仕事に誠実であったり、約束をきちんと守ったり、私が感じた日本人の良いところを見習って、働いていきたいです。



ワールドユースミーティング (WYM) 開催報告

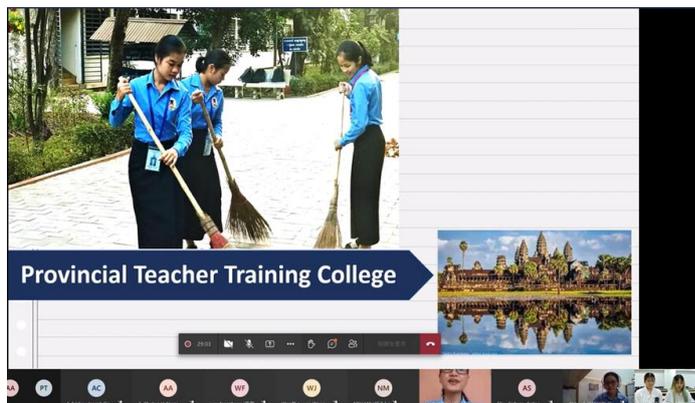
担当教員 佐藤 慎一

2021年8月5日と6日の2日間に渡り、World Youth Meeting (以下、WYM) を実施し、ベトナム、中国、インド、台湾、カンボジア、マレーシア、フィリピン、タイ、韓国、ネパール、インドネシア、ミャンマーなど、国内外の多くの大学生・高校生と交流を行いました。WYM は日本と海外の学生でチームを組んで行う協働プレゼンテーション他、国際的に議論・交流を行うイベントであり、本学部の学生が授業の一環でイベント運営にも取り組んでいます。従来、海外参加者を本学に招いて対面で実施していましたが、コロナ禍のため、昨年度に引き続き、国内外の参加校・参加者はすべてネットワーク経由での参加となりました。

参加者達は、本年度のテーマである “Regeneration and Sustainability” - How can you be responsible for attaining Sustainable Development Goals - (「再生と持続性」～SDGs 達成のためにどのような責任を負うことができるか～) について数ヶ月に渡って議論し、当日は合計 45 チームがプレゼンテーションを実施しました。

その他、各国からのパフォーマンスを楽しむ「エンターテインメントセッション」、気楽に会話を楽しむ「カフェトークセッション」など、オンラインながらも交流を深めました。

WYM を対面で開催できるようになることが待ち望まれますが、オンライン開催により参加者が広がっているという側面もあります。対面開催時にもオンラインのメリットをうまく取り入れてできるよう、実行委員会の学生は検討しています。



「国際フィールドワーク I」の実施

1年次の「国際フィールドワーク I」では、2月にマレーシア、フィリピン、カンボジア、アメリカ、インド（アメリカとインドは隔年実施）で2週間の研修を実施しています。新型コロナウイルス感染防止のために、2021年度の「国際フィールドワーク I」は昨年度に引き続き海外での研修を取りやめ、愛知県内のフィールドワークと海外の協定校とのオンライン交流を実施しました。

※以降の学生の学年表記は2021年度のものです。

During this year's Fieldwork 1, we were very lucky to have the time to explore the area where we live together. We discovered and rediscovered the many historical, cultural, religious, gourmet, and shopping hot spots around us. When we are once again able to

担当教員 Gary A. Kirkpatrick

travel freely and visit international destinations, we will be able to share what we learned about our neighborhood with those people we meet abroad. Now let's hear from two students about their experience this year.

◎Sagun Dahal (国際福祉開発学部 1年)

I can understand how crucial spirituality is regarding the well-being of individuals and the overall cohesiveness of a society. These Buddhist temples are the place where one can find inner peace and feel greater calmness. At OSU canon I could see people feeding to pigeons and other animals. It gave me insight about how much people care about animals and birds and their overall well-being. The world can learn from these people regarding the coexistence of man and animal as we see animal cruelty increasing and these local people can set an example for others. We also saw many local shops which are carrying on



traditional ways of making artifacts. These artifacts have a great significance in the culture of Japan and reflects how much importance people give to their traditions and culture. Tourism is an integral part of local societies as these people's earnings are mostly dependent on

visitors. In local cuisine, seafood and tea are used in greater amounts as it suits the local climate and perfectly blends with the way of life. People are very much aware about natural traditions and flora and fauna. They give special focus in preserving their heritage and monuments.

◎Shino Tanabe (田辺紫野:国際福祉開発学部 1年)

今回のフィールドワークでは、愛知の古い町並みが残る場所を巡りました。なぜ、技術が日々進歩した現在の生活の中でも、昔の物が残されているのかを明確にすることが目的でした。考えられる理由は、3つあります。

1つ目は、昔があったからこそ今が存在するからです。昔の人が築いてきた城や家はなぜ現在に至るまで建ち続けるのか。その耐久力は今の建設に生かされているはずです。2つ目は、今の生活の中では感じる事が出来ない趣が昔のものにあるからです。昔ながらの町に足を運ぶと、直接五感で感じる事が出来ます。それは何百年も人々に使われてきたからこそ感じる事が出来るものなのです。それらが残されずになくなってしまえば、感触や匂いは二度と感じる事が出来ないでしょう。3つ目は、「懐かしい」と思える場所を残すためです。佐久島に行くと、舗装されていない道がたくさんあり

ました。また犬山城下町に残る民家の型版ガラスは、現在は生産されていません。それらを見ると若い世代の私たちでもなぜか「懐かしい」と感じます。それは魅力的であるとも言い換える事が出来ます。



セントレアサテライトでの集中講義

担当教員 張 淑梅

2022年1月19日から21日までの3日間、中部国際空港（セントレア）にある本学の「セントレアサテライト※」で集中講義「グローバルキャリアデザインⅠ」を行いました。中部国際空港(株)代表取締役社長の犬塚力氏やセントレアホテル支配人の恒川幸三氏をはじめ、(株)ドリームスカイ名古屋、(株)全日警、高砂電気工業(株)など、空港業務やグローバルビジネスに携わる現場のリーダーを講師に迎え、様々な業界の事業内容だけでなく、グローバルリーダーとしての心構えまで学ぶ貴重な時間となりました。

受講した学生は、「グローバル人材のイメージを具体化することができた」、「なりたい自分に向かってキャリアデザインを描き、どのように能力を身に付けていくかを考えたい」と感想を述べました。グローバルフィールドで働くためのスキルやグローバルリーダーになるための資質を理解し、より具体的に自身のキャリアプランを描いていく契機になりました。

※日本福祉大学は、中部国際空港株式会社との産学連携協定に基づき、正課科目および正課外の活動の場として、貸会議室を「セントレアサテライト」という呼称のもと利用しています。



フライトパーク ボーイング787初号機の下にて

「ふくしAWARD2021」

担当委員 佐藤 慎一

全学教育センター主催で2022年1月25日にオンラインにて「ふくしAWARD2021」が開催されました。「ふくしAWARD」は、プレゼンテーション能力・ICT活用能力の向上、学部を超えた学びの共有を狙いとして行われるプレゼンテーションコンテストで、全学部の学生が対象です。

英語部門と日本語部門があり、多くのエントリーの中から一次審査を通過した計8件のプレゼンテーションが実施され、当日審査を経て各賞が授与されました。



◎「ふくしAWARD2021」大賞受賞者の声：国際福祉開発学部3年 Achintha Wijesinghe

「ふくしAWARD」では、福祉と人間の幸せを考えている熱心な学生が創造的なアイデアを発表します。学生たちは、日本のことだけでなく世界中の社会問題について話し合います。毎年、1年生から4年生までの多くの発表があり、一次審査を通過するだけでも困難です。

当日は、他のチームも素晴らしい発表をしたため、1位になるとは思ってもみませんでした。みんな、プレゼンテーションの内容もパフォーマンスも素晴らしかったと思います。

私達のプレゼンテーションでは、オンライン学生支援システムの開発と運用方法を紹介しました。アンケートを実施して情報を収集し、それを分析した結果、自分が置かれている様々な



状況のために、学生は迅速なサポートシステムを必要とすることがわかりました。そこで、私たちはそれを実現するためのアイデアをプレゼンテーションしました。幸運にも大賞を受賞することができ、とても嬉しいです。この勝利を支えてくれたすべての人に感謝します。

留学生のボランティア・地域活動

◎フードバンクを通じてボランティア参加 国際福祉開発学部3年 PHAM THI PHUONG ANH

日本語学校を卒業して、色々と調べたうえで日本福祉大学の国際福祉開発学部に入ることを決めました。この学部を選んだ最大の理由は、国籍を問わず、日本人も留学生もみんな平等に勉強できる環境が整っているためです。

新型コロナの影響で、日本だけではなく世界中の多くの人々が仕事をできず、とても生活が困窮しているというニュースを毎日目にします。自分の力だけでみんなを助けることができるとは思いませんが、できることから始めようと、南山大学の学生と協力し、ボランティアとして栄にあるナディアパークで毎月2回、困窮している学生に食糧を配布しています。

またみんなの生活状況を把握するため、毎回



アンケートに答えてもらっており、できるだけ希望に応えられるよう頑張っています。私は少しずつこの活動を広げていきたいと考えており、学生だけではなく、一般市民にも配布できるようにフードバンク愛知の方にいろいろと相談に乗ってもらい、今後の計画を作成しています。

◎「優しい日本語で落語を楽しもう」のパネリストとして参加

今年3月、ゼミ担当教員の田中先生の紹介で、私は名古屋市中区で行われた「優しい日本語で落語を楽しもう」というイベントに参加させていただきました。名古屋市内で外国人住民の割合が最も高い（住民の約1割が外国人）中区では、多文化共生を推進しようとして今回のイベントを企画したといわれています。

当日、「やさしい日本語落語」の部では、桂かい枝氏という落語家の話はとても分かりやすく楽しませていただきました。外国人に住みやすいまちづくりに向けて、やさしい日本語がとても大事だと分かりました。例えば、災害時の緊急情報や行政情報の発信はもちろん、普段のコミュニケーションにおいても有効です。

また、日本語に不慣れな外国人は、日常生活の中で言葉の壁で不安を感じたり、したいことができなったりします。それに対して、情報を母語に翻訳して伝える方法もありますが、「やさしい日本語」を使えばよりうまく伝えることもできます。情報が伝わると不安が減り、自分

人々が安定的に生活できるようになり、仕事を一生懸命頑張れるようになれば、国の経済や社会の発展につながるのではないかと思います。そして何よりこの活動を行うことにより、私のやる気もぐっと出てきて、自分自身にもとてもよい影響が出てきていると感じています。

国際福祉開発学部2年 DOAN DINH TIN

で解決できることが出てくると考えます。当日のパネルディスカッションでは、私はパネリストとして、これから外国人とのコミュニケーションで誤解を生じさせないためにも、Yes、No、どちらにもとれるような言葉を使わないことが大事と述べました。また、できるだけシンプルに、わかりやすい言葉に置き換えて、相手も反応しやすい言葉でコミュニケーションを図るという意見を述べました。



本学部の最優秀卒業論文賞の紹介

私が、研究のフィールドに選んだのは、岐阜県中津川市加子母地域です。加子母地域は、明治座・教育などの歴史や文化を継承しており市町村合併後も住民主体の地域づくりを積極的に行っている最先端の地域です。しかし、近年、進学や就職をきっかけに地域を離れる人が増加しています。さらに、地域の職である農業や林業に携わる人が高齢化してきており、人手・後継者不足が大きな課題となっています。このような地域で調査（20件のヒアリング、約500人へのアンケート）を実施し、現状と課題の見える化を目指しました。その際に、最近注目されている、SDGsの理念（総合的な視点、目標・ターゲット等の構成 etc.）を活用し「加子母版ローカルSDGs」を作成しました。

将来を見据え、今何をすべきかを再確認し、多くの人と共有していくことが必要であると学びました。また、他地域での作成や加子母地域での長期的なフィードバックなどの今後の課題も明確になりました。

私は、この4年間の学びで、自ら課題を発見

2021年度最優秀卒業論文表彰者 岩崎右城

しどのように解決するかを考える力を高めることができたと思っています。学生だからこそその強みを活かし、積極的に活動することやたくさんの方と交流することができました。コロナ禍で活動に制限はありますが、新たな方法や活動を自ら探り取り組むことをおすすめしたいです。その経験は必ず役に立ちます！

社会人になっても学生時代の経験を活かし、成長を続けます。



「ワールド・コラボ・フェスタ2021」への出展

国際福祉開発学部学部長 吉村 輝彦

国際福祉開発学部では、継続的に「ワールド・コラボ・フェスタ」（愛知県国際交流協会等で開催される実行委員会主催）に参加していますが、コロナ禍において、2021年度は、前年度に引き続き、オンライン出展しました。オンライン形式での出展は、時間的な、そして、物理的な制約を越えた学びのきっかけとなりました。多様なバックグラウンドを持つ学生たちは、多文化共生社会やSDGsの実現に向けて、様々な取り組みを行っています。

2022年度は、そうした成果を対面で多くの人たちと共有できる機会が来ることを願っています。



新任教員の挨拶： 砂原 美佳 准教授

2021年4月に国際福祉開発学部に着任し、ちょうど1年が過ぎました。あっという間の1年でしたが、その間、楽しく充実した日々を過ごすことができました。

とくに私にとって新鮮だったのは、ハンディを抱えた学生さんがキャンパスの中に自然に溶け込み、学んでいる姿です。バリアフリーの建物など行き届いた設備もそうですが、日本福祉大学に勤めるまで気づくことのあまりなかった「学びの場」を発見する毎日です。こうした環境が当たり前になっていることは、日本福祉大学の特長の1つだと思います。その中で多様性を育み、切磋琢磨している学生や教職員の皆さんとともに学んでいけることがとても嬉しいです。これからどんな発見ができるか、楽しみにしています。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



編集後記

新型コロナウイルスの流行下で3年目の大学生活となりました。海外フィールドワークや留学がなかなか実現できないという制約が続いた環境の中でも、学生たちが自分の問題意識に基づき主体的に挑戦を続ける姿勢は、今回の学部だよりの投稿から読み取れたのではないかと思います。今年も引き続き万全な対策をしながら、より充実した大学生活を送れるよう、みんなで力を合わせて様々な学びと体験に取り組んでいきたいと考えています。最後に、学部だよりの作成と編集作業にご協力いただいた学生と教職員のみなさんに、心より感謝を申し上げます。(担当：張 淑梅)

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229番地
TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281

編集人：国際福祉開発学部 教授 張 淑梅
問合先：東海事務室 国際福祉開発学部担当 (kokusai@ml.n.fukushi.ac.jp)

国際福祉開発学部

